

民研だより

民主教育研究所

Research Institute of Democracy and Education

No. 151

2022年3月10日

CONTENTS



- ◆ 「新型コロナウイルス感染症の広がり」の今、思うこと … 横湯園子 1
- ◆ 2021年度「ジェンダーと教育」研究委員会 …… 棚橋昌代 3
- ◆ 第30回全国教育研究交流集会報告 …… 鈴木敏則 4
- ◆ **声明** わたしたちはロシアのウクライナ侵略に反対し、世界の人々とともに平和の構築に努めます …… 民主教育研究所運営委員会 7
- ◆ 日誌、寄贈図書等 …… 8

「新型コロナウイルス感染症の広がり」の 今、思うこと

横湯園子（民主教育研究所顧問）

今、私たちは何を？

心理臨床、精神科臨床では相談件数が激増している現在です。虐待や性被害、いじめ、希死念慮や「うつ」を疑うようなシビアナ相談が多くなっています。

「今」という現在の子ども、青年たちが置かれている状況について、「子どもの命・医療・コロナ」とも重ねて考えなくてはならなくなっている現在です。「私たちは何を？」「今、私は？」が問われているのではないのでしょうか。

I コロナ禍のひろがりの「今」

「20歳後半ばまでひきこもっていた」

青年A君の場合

A君は小学3年生の時、授業中の教師の間違いを指摘したのをきっかけに体罰を受けるようになり不登校になりました。A君に直接会えたのは、

母親とのカウンセリングから数年後の「大学検定試験」を受ける直前でした。

「カウンセリングはレストランで」という彼の希望でした。その頃の私は大学を定年退職をされていて、相談室をもっていないでしたから、レストランを探すのは私でした。

もちろん、レストランでの食事やコーヒー代は割り勘です。彼にとって「割り勘」そのものが社会との出会いになったのではないのでしょうか。食事をしながらのカウンセリングが主でしたが、「喫茶店で」と言われれば、喫茶店を探すのは私でした。

彼にとって、私と言う人間は社会を知る「窓」であったはずです。「今」の自分について話しながら、心の中で体罰によるトラウマ・心的外傷を過去化していったのではないのでしょうか。

私についての生育史的な質問もすることがあ

りました。

「先生は地獄の底について知っていますか」

「地獄の底？」

「はい」

「地獄の底かどうか分からないけど……」と言った後で、私は私の父親が戦前、治安維持法で逮捕されたこと。獄中で結核になり、仮保釈中に病死したこと。私が1歳の頃だった等々について話しました。

「先生も地獄を知っているんだ」

「そうね。地獄、地獄の底とも言えるわね」

「ボクには地獄の底ありませんでした」

「底もない？ 底なしの地獄…」

「はい。底なしの地獄です。底なしの恐怖でした。先生、底なしの恐怖、わかりますか。ボクの底なしの地獄につきあってくれますか」

「ええ」

各自、各様の心的外傷、トラウマです。彼は彼なりの経緯を経て、専門職についています。

「上京してのカウンセリング」の青年K君の場合

K君は東京都内の大学に入学した直後から「引きこもり」の状態になりました。「出身地の病院や機関でのカウンセリングでは、自分のひきこもりが知られてしまうのでは」ということで、上京してのカウンセリングでした。

「次のカウンセリングは喫茶店で」「レストランで」というK君でした。私は定年退職後、カウンセリングルームをもたないでいました。K君と向き合いながら、私は心の中で「私って、ルンペンカウンセラーみたい」と、つぶやきながら相談にに応じていたのです。

このような治療のあり方が許されるのかどうか。大学を退職しているとは言え、自分自身のあり方の是非を問いつつ、彼と関わっていました。

K君は出身地の会社に勤務しています。

「小学三年生の時に、男性教師から体罰を受けて以降、不登校」のSさん

母親との相談・カウンセリングは数年に及びました。私がSさんに会えた時の年齢は二十歳を過ぎていました。

Sさんの「私と一緒に、食事をしてくれるなら、カウンセリングを受けても」という条件に、既に退

職していた私は彼女の条件に応じることができました。もちろん、レストランを探すのは私でした。時々「私って、変なカウンセラー」と思うこともありましたが。その度に、国立国府台病院の精神科医、ケースワーカーたちを思い出すのでした。「ああ、私の原点は国府台病院なのだ」と思うのでした。

Sさんは受験用の問題集を持ってきて、質問をすることもありました。

「この問題、私には無理よ」とギビブアップする私に「大学の先生でも？」

「私は文系の人間なの。理数系や医学系の問題は無理よ。解けない」

「でも、先生は精神科のある病院に勤めていたこともあるでしょ？ お母さんが、そう言っていた」

「ええ、児童精神科医がいる児童病棟だったから、今のような質問はお医者さんたちが付き合ってくれていたはず」

彼女は私の「無理よ。無理」という返答を面白そうに頷いていました。時を経た現在、彼女は公立病院に勤務をしています。

つい最近、彼女から久しぶりの手紙が届きました。「コロナ禍での過ごし方」の私へのアドバイスに涙ぐむ私でした。

2 コロナ禍をどう生きていくのか

この間、何度も読み返している本の一つに、イタリアの小説家パオロ・ジョルダノの『コロナの時代の僕ら』があります。

「感染症とは僕らのさまざまな関係を侵す病だ」という物理学を学んだ科学者の視点と小説家でもある豊かな表現力で、「コロナウイルスの流行が、僕らの時代最大の公衆衛生上の緊急事項となりつつある今、何を守り、何を捨て、私たちはどう生きていくべきか」を小説にしています。

パオロ・ジョルダノは言います。「家にいよう。そうすることが必要である限り、ずっと家にいよう。患者を助けよう。死者を悼み、弔おう。でも今のうちから、あとのことを想像しておこう。『まさかの事態』に、もう二度と、不意を突かれられないために」と。

私も家にいることをマイナスと思わないこと。できうことをすることで、「小さな喜び」を創りだせるのではないのでしょうか。

2021年度「ジェンダーと教育」研究委員会

棚橋昌代（「ジェンダーと教育」研究委員会幹事）

現在当委員会は10人の委員と8人の通信研究委員で構成している。2021年度もコロナ禍でほぼ毎月開く例会はZoom開催した。

今年度の研究テーマは、①新自由主義的政策の行き詰まりが見えてきたなかでのジェンダー平等や家族のあり方を問う、②多様な人々の人権尊重を基盤とするセクシュアリティ・ジェンダー平等教育の現状と課題、③災害とジェンダー、④コロナ禍で露わになった労働問題をジェンダー平等視点から問う、⑤インターセクショナルリティ（差別の交差性）を追求する、である。

2021年4月に文部科学省が公表した「生命（いのち）の安全教育」の教材と指導の手引きをとりあげた。そこでは「発達の段階に応じた、『生命を大切にする』『加害者にならない』『傍観者にならない』教育を」と、「子どもたちを性被害から守る」ことが強調されており、自分のからだを大切にする意識を育てる観点がない。

この手引きと関連させて、絵本『あっ! そうなんだ! わたしのからだ』（星野恵・中野久恵著、エイデル研究所、2021年）の著者星野さんから、絵本作成の基本の考え方の報告をうける。子どもがまわりの人から、からだを大切に扱われる経験の中で「自分のからだは大切」という意識を育てていくことが性教育の第1歩だ、さらに性を語るうえで大切なのはいろいろなことを話し合える関係づくりと、大人と子どもの対等な学びあいだと強調。生活実態、環境、発達段階などが多様ななかで対等に関わりあう対等性、主体的に学びあう人間関係がつくれる性教育の在り方が求められている。この報告と議論をもとに、夏の「教育のつどい」第17分科会「ジェンダー平等と教育」で、日暮かをるさんと星野恵さんが「子どもたちと学びあいたい『人権』と『性』」と題してレポートした。

学習文献として、『民主主義教育のフロンティア』の池谷壽夫さんと橋本紀子さんの論文、『季刊セクシュアリティ』102号の永野佑子さんの論文などをとりあげ、そこから全国教育研究交流集会での当委員会企画のラウンドテーブルでの永野さんの報告「性暴力からの回復の道をさぐる—ジェンダー・セクシュアリティと障害の交差する地点から」、第6分科会「ダイバーシティを問う」での池谷報告につながった。

永野さんの報告は、ある成人施設でネグレクト育ちの知的障害者C子さんが所長Aに数年にわたり受けた性加害を市に訴え、市は虐待の事実ありと判定したが、理事会はAを擁護、本人は裁判を起こす予定である事件から学ぶもの。性虐待などを受けて育った人が後に性化行動や様々な暴力行為にでることは障害者施設の職員にとっては常識だ。子どもの悩みや困難に向きあう性教育は人間の尊厳に気づかせ、自己肯定感を育て、人間の平等・同等を学ぶ人間回復の教育であり、人権と発達保障のために包括的性教育を広げることの今日的意義を再確認した。

第6分科会では、池谷さんから「多様性」という言葉で理想的な社会が実現されるかのような幻想がふりまかれ、新自由主義的経済政策下で経営戦略に結び付けてダイバーシティをとらえ、教育では生産性・効率化を高める人材育成の戦略となっていることが示された。菟輪明子さんはコロナ禍で女性の困難を深刻化させた社会・経済構造を解き明かし、佐竹葉子さんは軽視されている特別支援教育の実態を報告した。

コロナ禍で可視化されたジェンダー不平等の構造、ダイバーシティの名を借りた個を軽んじる政策などについて、実践の掘り起こしも含めて当委員会の研究課題も多い。

つながりと共同の中で育つ未来

—民研30年を力に—

第30回全国教育研究交流集会 **報告**

12月25日(土)・26日(日) 東京(オンライン併用)

第30回全国教育研究交流集会は、民研運営委員会主催「つながりと共同の中で育つ未来—民研30年を力に—」をテーマに12月25日(土)、26日(日)に全国教育文化会館で開催されました。

25日午前は「性暴力からの回復の道をさぐる」と「高校統廃合を考える」の2つのラウンドテーブルをオンラインで開催し、午後の全体会は会場と全国の参加者をとをオンラインで繋ぐ形での初めてのハイブリッド開催となりました。

全体会(1日目)

実行委員長の中村雅子副代表運営委員から、基調報告「つながりと共同」、「民研設立からの30年」、「コロナ禍と教育条件の保障の課題」、「教育におけるICTと教育実践の課題」、「公教育解体の危機と再構築の課題」の5つの柱により報告されました。

記念講演

記念講演は「沖縄から次の戦争を止める」と題して、映像作家でありジャーナリストの三上智恵さんは「沖縄はオリンピックが終わると軍事一色になっている。自衛隊とアメリカ軍が一緒になって各島々を使って闘うEABO(遠征前方基地作戦)が進められている。沖縄では『南西諸島を絶対に戦場にさせない県民の会』(仮称)の設立へ。これは沖縄だけの問題であるかのように報道もされていない。有事になれば北海道まで含めて皆さんが住んでいる所も戦場になる」と危険な情勢について語られました。

シンポジウム

シンポジウムは「コロナ禍での子どもの困難と新しい公教育のあり方を考える」をテーマに、北

海道高校教師の本多由有子さんから「今、高校現場で起きていること」、民研副代表運営委員の児美川孝一郎さんから「惨事便乗型教育『改革』と公教育のゆくえ」、立教大学名誉教授の浅井春夫さんから「『子どもへの無関心』の戦後政治史に抗して」の報告に基づき、会場やオンライン参加者から質問や意見が出されました。三上さんの講演とシンポジスト3人の方の報告詳細は『人間と教育』113号(3月10日発行)に掲載されておりますのでお読み下さい。

26日は「コロナ禍と子ども・若者」、「中教審『令和の日本型学校教育』の検討」、「GIGAスクールと公教育の近未来」、「学校、地域を私たちの手に」、「教師の働き方のゆくえ」、「ダイバーシティを問う」の6つのオンライン分科会が開催されました。

設立記念のつどい

民研は今年2月19日に設立30年になりました。今集会の25日夜に「民研設立記念のつどい」を開催しました。30年を期に冊子「民主教育研究所30年のあゆみ」を発行、CD版「年表」を制作しました。CD版「年表」は30年間の「民研の動き」、「教育・文化、全教・教職員の動き」と「国内外の動き」3視点から詳細に記述されております。(冊子「民主教育研究所30年のあゆみ」とCD版「年表」をセット価格1000円で販売しておりますが残部が僅かですのでお早めにご注文をお願いします)

「設立記念のつどい」の中で上映されました動画『民研30年、そしてこれから』は、「民研設立のころ」、「機関誌『人間と教育』の発行」、「民研に関わって」、「地球時代とは」、「そして、これから」の5部構成になっており、ホームページから観られますのでご覧下さい。

ラウンドテーブルと分科会

ラウンドテーブル1

性暴力からの回復の道をさぐる

世話人 杉田真衣(東京都立大学)

レポーター 永野佑子(性教協障害児・者サークル)

知的障害者に対する性暴力の話を中心として、虐待と性化行動の関係、障害児・者と性教育、「同意」とは、というテーマについて議論した。

ラウンドテーブル2

高校統廃合を考える

世話人 山本由美(和光大学)

山口高教組山田泉先生から定時制高校統廃合を中心に再編計画、長野高教組、京都高教組から統廃合に対する運動を中心に報告が行われた。富山、北海道、東京、名古屋などの高校関係者から次々と各地の状況について紹介された。学舎(キャンパス)形式についても質問が多かった。

第1分科会 コロナ禍と子ども・若者

レポート

冒頭発言 コロナ禍で子ども・若者の公共空間をつくる (馬場久志/埼玉大学, 民研運営委員)

- ① 地域で支える子どもの総合支援を目指して (間瀬田結実/彩の国子ども・若者支援ネットワーク)
- ② コロナ禍で非正規労働者の連帯をつくる:首都圏青年ユニオンの取り組みから (栗原耕平/首都圏青年ユニオン)
- ③ コロナ禍での図書館の実践から見える公共空間のあり方 (中沢孝之/白河市立図書館, 図書館問題研究会)

コメンテーターより (福井庸子/大東文化大学)

世話人 馬場久志(埼玉大学) 朝岡幸彦(東京農工大学) 松田洋介(大東文化大学)

コロナ禍で公共空間をいかに創出することが出来るのか。そのような創出空間をつくるためにはどのような関わりが必要なのか。そして、そのような関わりをつくる担い手をいかに公的に支えていくか。学校制度の外部だからこそ成立する。しかし、学校外部だからこそ脆弱でもある空間を創出するために何が必要なのかを議論した。

第2分科会 中教審「令和の日本型学校教育」答申の検討

レポート

問題提起 (中村清二/大東文化大学)

① 「令和の日本型学校」の政策構造と今後の展望 (仲田康一/大東文化大学)

② 「個別最適な学び」の虚像と実像 (子安潤/中部大学)

③ ICT デバイスの実態と課題 (石井崇史/東京都公立小学校)

世話人・司会 金馬国晴(横浜国立大学)

中村清二(大東文化大学)

- ① ICTは使えるけど使わない判断が大事。学年による。低学年では使わないなど。文字を覚える意欲をなくしかねない。獲得する前に音声入力などで操作してしまう。
- ② 科学技術立国として、イノベーションを教育から、と政策側はいうが、パソコンの配布やWi-Fi、支援員などが中途半端。
- ③ 今の技術では、何につまずき、どうしてそう答えたかはわからない。教科書の練習問題程度のドリルに過ぎない。

第3分科会

GIGAスクールと公教育の近未来

レポート

問題提起 (児美川孝一郎/法政大学)

① 学校現場からの実践報告 (道端 寿奈/東京都小学校教諭)

② よいGIGAスクールの3条件 (山本宏樹/東京電機大学)

③ GIGAスクール構想と公教育の 行方 (中嶋哲彦/愛知工業大学)

世話人 中嶋哲彦(愛知工業大学)

児美川孝一郎(法政大学)

- ① 学校教育でのICTの活用を忌避することはできないし、また適切でもない。教師の主体的・組織的な実践研究を通じて、ICTの有意義な活用の仕方を解明すべきだ。
- ② 授業づくり・仲間づくりには実践の豊かな蓄積があり、ICTによる無原則な代替には懸念がある。しかし、ICTの発展により、それを適切に活用できる事項は今後も拡大の可能性はある。

③ Society5.0 またはGIGAスクール構想は学校教育におけるICT活用にとどまらず、公教育制度や社会構造そのものの改造を含意する可能性があり、慎重に見極める必要がある。

第4分科会 学校、地域を私たちの手に

レポート

問題提起 (山本由美／和光大学)

- ① さいたま市の「パフォーマンス型」教育改革はいま一巨大一貫校計画、突然のコロナ禍でのリモート授業など―

(さいたま市教職員組合)

- ② 地域に根ざす高校

(今井典夫／兵庫県立村岡高校)

- ③ 高知県四万十市の小規模校を守る共同

(有原陽子／保護者・川渕誠司／市議会議員)

世話人 山本由美(和光大学) 石山雄貴(鳥取大学)

山本由美さんより新自由主義的学校再編に関する問題提起をいただき、各地から3本の報告をいただいた。1本目はさいたま市の教職員の方より、さいたま市が抱えるトップダウン教育行政により子ども・保護者が振り回され、教職員が疲弊していく状況に関する報告。2本目は今井典夫さんより兵庫県立村岡高校の実践報告。3本目は有原陽子さん・川渕誠司さんより「高知県四万十市の小規模校を守る共同」と題し、特に大学誘致に伴う学校統廃合と地域でのその反対運動の経緯についてご報告をいただいた。その後、フロアからも各地の学校再編の現状を共有して頂き、学校再編に対抗する地域の共同をいかに構築していくのかについて、全体で議論した。

第5分科会 教師の働き方のゆくえ

レポート

問題提起 さいたま地裁10.1判決の問いかけもの (高橋哲／埼玉大学)

- ① 埼玉超勤訴訟を通して

(田中まさお／埼玉教員超勤訴訟原告)

- ② 埼玉教員超勤訴訟の法的争点と課題

(若生直樹／埼玉教員超勤訴訟原告弁護士)

- ③ 埼玉教員超勤訴訟を如何に受け止めたか

(糀谷陽子／全教中央執行委員)

- ④ 埼玉県教員超勤訴訟を地域組合は如何に受け止めるか

(石垣雅也／全教近江八幡教組)

世話人 高橋哲(埼玉大学) 勝野正章(東京大学)

討論においては、埼玉教員超勤訴訟の2021年10月1日判決を受けて、被告側が主張する「包括的解釈」をどのように乗り越えるか、校長の安全配慮義務、割振りによる業務調整義務をどのように問うべきか、また、1971年制定当時において校外自主研修が認められていたこととの整合性をどのように考えるか、さらには、自主性、自発性という言葉は、保護者や市民には届かない言葉となりつつあるのではないか、という問題提起がなされた。また、地域支部における交渉が重要な役割を果たす一方で、交渉と法律違反をめぐる問題は区別すべきではないか、また、訴訟と教職員組合との協働をどのように実現しうるかについて活発な議論がなされた。

第6分科会 ダイバーシティを問う

レポート

問題提起 (杉田真衣／東京都立大学)

- ① 日本における多様性教育の危うさ

(池谷壽夫／了徳寺大学)

- ② 中教審答申の示す「新時代の特別支援教育」とは (佐竹葉子／埼玉県特別支援学校教員)

- ③ コロナ禍が暴くジェンダー構造と女性差別

(蓑輪明子／名城大学)

世話人 杉田真衣(東京都立大学) 荒井文昭

(東京都立大学) 秦範子(都留文科大学)

ダイバーシティ・多様性の理念は、新自由主義的政策と分かちがたく結びついているにとどまらず、コロナ以前より日本の社会構造が差別・不平等を生み出し続けてきた事実へと人々が目を向けることを阻んでいる。そのようななかで私たちはいかにして保育や教育等の市場化の動きに対抗し、「多様性」の真の尊重を実現し得るかということを、人権、福祉と教育、生活と教育、ケア、共同、自治といった視点から議論した。

★ ラウンドテーブル・全体会・分科会の議論の詳細は近日中にホームページにアップします。



【声明】

私たちはロシアのウクライナ侵略に反対し、 世界の人々とともに平和の構築に努めます

2022年3月4日

民主教育研究所運営委員会

ロシア政府は2月24日、ウクライナへの侵略を開始した。ロシア軍はウクライナの軍事基地だけでなく、市民生活の場である主要都市を攻撃し、非戦闘員である市民や子どもが犠牲になっている。これは安全保障に関する国連憲章や国際法に明確に違反し、主権国家に対する明白な侵略行為であり、どのような理由によっても正当化することはできない。

日本を含む世界各地ではもちろん、ロシア国内でも「侵略をやめよ」という声が渦巻いている。3月2日の国連総会では、141カ国の圧倒的な賛成でロシアへの非難決議が採択された。私たちは、ロシア軍の即時撤退を強く要求し、関係者による和平への真摯な協議と合意によって問題の解決を図るよう切望する。

さらに見逃せないのは、プーチン大統領が、ウクライナ軍の通常兵器による反撃に対して、核兵器使用の可能性に言及して威嚇していることである。これはすでに核兵器禁止条約が発効し、「核兵器の存在自体が悪である」との認識が国際的に広まっているなかで、絶対に認められない暴挙である。私たちは、核兵器による威嚇を直ちにやめるよう強く求める。

国際紛争の火種は、日本を含む東アジアにも存在し、近年その緊張は強まってきている。国内ではこの機会を利用して、憲法9条を改悪し、「敵基地攻撃能力」保有の検討や「核共有」議論の提言など、軍拡競争をあおる論調も広がっている。国際紛争を解決する確かな道は、国連憲章や国際法にもとづいた平和外交を追求していくなかでこそ開けていくものである。

日本政府は唯一の戦争被爆国として、憲法9条で武力による威嚇と行使を放棄した決意にもとづいて、国際社会でも積極的な役割をはたすべきである。

日々の映像を通じてウクライナの現状に触れている日本の若者や子どもたちは、罪のない市民や子どもたちが犠牲になっている事実に関心をもち、不安や疑問（なぜ戦争は無くならないのか）を伴いながらも、真剣に平和実現の道を探ろうとしている。私たちは、こうした揺れ動く感情や真摯な探究の過程に寄り添うとともに、人類が直面している解決困難な課題に、若者や子どもたちとともに向き合い、事実をもとに声をあげ、語り合い考え合う機会を共有することを意識的に追求することが極めて重要であると考えます。

こうした姿勢にもとづく実践と研究が、いま切実に求められており、民主教育研究所はその課題に真剣に応えていく決意である。

民研日誌 12～2月

- 12月 4日 子どもを守る文化会議
 12月 6日 三役・事務局会議
 12月 8日 入館団体会議
 12月 9日 子ども全国センター幹事会
 12月10日 第1回人事委員会
 中等教育研究委員会
 『人間と教育』112号発行
 「民研だより」No.150発行
 12月18日 子ども子育て九条の会
 12月19日 人権と民主主義の教育をめざすネットワーク
 12月20日 『人間と教育』編集委員会
 12月23日 『人間と教育』インタビュー
 「環境と地域」教育研究委員会
 12月25日 第30回全国教育研究交流集会 全体会
 民研設立30年のつどい
 12月26日 第30回全国教育研究交流集会 分科会
 三役・事務局会議
 1月 6日 第2回人事委員会
 1月 8日 第12回運営委員会
 1月13日 教育のつどい実行委員会
 1月14日 中等教育研究委員会
 1月20日 「環境と地域」教育研究委員会
 語ろう、子どもと教育準備会
 1月21日 「ジェンダーと教育」研究委員会
 1月22日 全教シンポジウム「教職員の長時間勤務
 解消の確かな道すじをさぐる」
 子どもの権利条約市民・NGOの会春の研究集会
 1月25日 『人間と教育』編集委員会
 1月27日 子ども全国センター幹事会
 1月29日 高校教育研究委員会
 1月30日 高校教育シンポジウム
 2月 2日 語ろう、子どもと教育準備会
 2月 7日 三役・事務局会議
 2月10日 第3回人事委員会
 副代表運営委員会議
 2月12日 第13回臨時運営委員会
 2月16日 語ろう、子どもと教育準備会
 2月17日 『人間と教育』編集校正
 2月19日 教育課程研究委員会
 全教大会
 2月20日 全教大会 民研報告
 2月24日 『人間と教育』出張校正
 語ろう、子どもと教育準備会
 子ども全国センター幹事会
 「環境と地域」教育研究委員会
 2月25日 「ジェンダーと教育」研究委員会
 教育のつどい実行委員会
 2月27日 語ろう、子どもと教育 参加と共同の学校
 づくり・教職課程づくり交流集会

民主教育研究所『年報2021』（第21号）

2021年7月発行 1800円

民研で販売しています

コロナパンデミックと教育

寄贈図書・資料 12～2月

- ◆『教育の自律性と教育政治』 荒井文昭 大月書店
 ◆『1950年代初頭における労働者同志会の結成と日教
 組幹部』 広田照幸 日本大学文理学部人文科学研究
 所
 ◆『広田照幸編『歴史としての日教組』上・下 富山仁貴
 富山仁貴氏の書評へのリプライ』
 広田照幸 日本大学文理学部人文科学研究
 所
 ◆『戦後日本の教職員組合と社会・文化(その2) 社会・
 文化(その3)』 研究代表者 広田照幸 埼玉学園大
 学人間学部布村育子研究室
 ◆『戦後教育労働運動ヒアリング記録 堀尾輝久』
 研究代表者 広田照幸 日本大学文理学部広田研究室
 ◆『戦後教育労働運動ヒアリング記録 黒羽亮一』
 研究代表者 広田照幸 埼玉学園大学人間学部布村育
 子研究室
 ◆『みんなのねがいをつくる学校』 奈良教育大学附属小
 学校編 地亜弥子解説 クリエイツかもがわ
 ◆『校則を考える』 大津尚志 晃洋書房
 ◆『近現代日本教員史研究』 船寄俊雄 近現代日本教
 育史研究会編著 風間書房
 ◆『教科書レポートNo.64 2021』
 「教科書レポート」編集委員会 出版労連
 ◆『明日につなぐ教育』 西村美智子・小寺隆幸 遊行社
 ◆『不戦No.184』 不戦兵士・市民の会 不戦兵士・市民の会
 ◆『ちば 教育と文化No.98』 千葉県教育文化センター
 編集 千葉県教育文化センター

季刊『人間と教育』を発行しています

1190円＋税 全国の書店で販売 民研から購読可能

- ◆113号 <2022年3月>
 特集 コロナ禍の子ども・学校と新たな公教育の探求
 ◆112号 <2021年12月>
 特集 センセイが足りない！
 ——どうつなぐ？ 教師のバトン

賛助会員 加入のお願い

民主教育研究所は

全日本教職員組合の組合員と賛助会員によって、財政が支えられ運営されています。真理と真実に基づき、研究を通して広く教育に携わる者の実践を支え励ます拠点として、1992年に設立されました。8つの研究委員会によって、研究が進められ、研究と実践をまとめた『年報』や季刊『人間と教育』を発行しています。

賛助会員になると

季刊『人間と教育』、「民研だより」（年4回）を無料で自宅に郵送。民研発行の書籍を各1冊、半額で購入可。会費は1万円（大学院生5,000円）です。

民研だより No.151 2022年3月10日

発行 民主教育研究所 発行責任者 梅原利夫

〒102-0084 東京都千代田区二番町 12-1

全国教育文化会館 5F

TEL 03-3261-1931 Fax 03-3261-1933

Email office@min-ken.org

HP https://www.min-ken.org

